

もりおみずき

最終選考候補の8作品を受け取った時、こ
とに今年は感じるが多かった。全世界の
人々が閉ざされたような暗い時代を生きてい
る今、南の青い海に浮かんだ小さな島の文学
賞がかそけき光を四方に放ち、人々の生きる
よすがのささやかなひとつになれればと願っ
た。私の夢のような思いだった。
まず選外となった作品について紹介したい。
本当に短い感想にすぎないけれど、どんなに
か思いを込めて作者が作品に向かっていたの
かがひとしと伝わって来たことを誰とも知らぬ
作者の方に伝えたかった。
順不同で紹介する。「不死王の島」は一人
の老人の巧みな語りで進み、不死王とはとい
う謎解きで作品は終わる。誰一人として幸せ
に出会うことのない暗く悲しい作品だった。
「神歌由来」の文体と描写力には圧倒された。
いつの時代か、ある島の、ヒトならぬケモノ

「ならぬ」大神と恐れられたものが神として祭られるまでを、怒涛のような筆力で書ききっている。「家出は舟で」は瀬戸内海のとある島から親の舟を持ち出して家出した十四歳の少年とその顛末を窺う二人の少年が主人公。ストーリー性よりも少年期の自分でもコントロールできない激しい心理を力を込めて描写して独特の面白さがあった。「嘆きの森」は静かに心に染み入るような作品であった。子供時代に亡くなった親友。四十年後、五十歳になっと思って思う。あのときは聞き得なかった。「静かに響く悲しみの声が周りにないか耳を澄ます」と。胸打たれる述懐だ。優しき大人になったのだ。「朝光の畑」は史実を丹念に調べ、そこにファンタジーを取り入れた力作である。宮古島にも戦争はあった、のである。私たち年代の者は宮古の戦争どころか沖縄の地上戦さえ習ってはこなかった。宮古の図書館で子供たちに読ませたいと思った。

これらの五作品がさらに練られていつか

陽の目をみることができそうですように。いっそ
うの努力と書く楽しみを求め続けていた。ただき
たい。受賞作一席「猫投祭」(マユーナギー)に
はただただ感嘆した。架空の秘祭があたかも
実在するよう細部まで構築されていて見事
である。ほのとしたユーモアも感じるし涙も
誘われた。今年の「宮古島文学賞」として内
外に発信できる誇らしい作品である。二席の
「レモン色の月」も読む喜びを十分に
味わわせてくれた。長い別々の暮らしの後、
共に生きることを選んだ母と娘。それぞれの
誠実な清潔な来し方。比喻表現がふくらみを
持ち北国の生活が活き活きと伝わってくる。
母娘の晩年の穏やかな日々が見えるようだ。
佳作の「島の音」は爽やかな児童文学である。
音楽と月の光と波の音と美しい少年。サシバ
とアオウミガメも登場する。南の島の自然の
豊かな音が豊かな音を奏でることを知った少
年はバイオリン修行に欧州に旅立っていく。

それぞれの運命を素直に受け取って。
応募作品を読み終え、人が人とともに希望
を持って生きていく明るい未来が見えるよう
な気がして力が湧いてくるようだった。
「宮古島文学賞」はこの時代にかそけき光
を放ち人々をそれぞれのささやかな夢への途
上にと誘っているのだと思った。